



曾根順子さん

行政書士／掛川市構江区自主防災会コーディネーター

地域防災の担い手

機会と理解に育まれて —地域女性役員へ—

地域活動には全く 関わっていません

10年前、行政書士として仕事一筋だった曾根さん。そんな頃、掛川市構江区（かまき）の自治会婦人部長選出の順番が組に回ってきた。転入してきて、地域活動とは全く無縁だったが、やむなく立候補。2003年に区婦人部長となった。

自治会活動でも「女性は一步下がって」という考え方は女性側にも根強い。普段から女性の要望は上がっていたが、当時、婦人部は自治会の下部組織のひとつでしかなかった。地域変革のためには、女性も男性同様の責任を伴ってこそ、初めて対等な立場で声を上げることができると感じていた。

女性副区長、 自主防災副本部長になる

その頃、自治会男性役員の担い手不足のため、女性役員の登用が取りざたされて、「副区長に」と曾根さんに白羽の矢が立つ。断っていたが、夫が「役員以外なら」何でもします」と、念押しし断り言葉が承認と受け取られ、引き受けることに。そして2005年、構江区初の女性副区長が誕生した。

最初の1年は、仕事を覚えるのに必死だった。ところが副区長は自動的に自主防災会副本部長になることを知り、困惑する。当時、構江区の住人は200戸800人。多くの命を預かる立場と気づき、果たして女性の自分にできるのだろうかと悩んだ。それまで防災は男性の仕事と想っていたからだ。

それなら勉強するしかない、災害ボランティアコーディネーター講座を受講。その後、掛川市自治会女性役員連絡会を立ち上げ、防災講座を開くなど女性が防災に関わるきっかけを作った。

男女の役割を変えた 異例の防災訓練

2009年、自主防災会会長（男性）からの提案で、男性が炊き出し、女性は救護・テント組み立て・消火器訓練という男女役割を変えた防災訓練が実施された。例年20人程の女性参加者がその年は70人。男女の役割を変えたことでの訓練も女性にとつて貴重な経験となった。また男性も、大きく重い釜を運び、大量の米を研ぎ、火起こしに挑戦。最初は戸惑っていたが次第に火の番に興味を持った。また、授乳やトイレ、着替えの場所に便利な簡易テントが防災倉庫に保管されていることが女性たちに周知された。

構江区で行われた「男女役割交代防災訓練」がもたらした影響は大きい。あれから6年、今では区内18組の自主防災炊き出し班は、男性がメイン。誰が強制したわけでもないのに、男性が自然増加した。訓練に参加する女性も全体の2、3割と、10年前に比べ確実に増えた。

影響は防災だけではなく。それまで婦人部担当だったゴミ出しを男性が担当。男衆だけの慣習だった祭りの屋台引きに女性部が新設された。また、祭りの食事の準備は「みんなでやる」が当たり前となり、老若男女が参加するようになった。

構江地区のような男女共同参画防災訓練は、珍しい例だと言われる。

さらに次世代を担う子どもたちを視野に入れた地域活動や、掛川東高校と協働での防災資料を作成など、異世代交流も盛んになった。

これからも女性役員を 育てていきたい

曾根さんが副区長になり、男性だけだった役員選考委員会に女性を入れるための別規約が設けられた。単なる数合わせではなく、地域で活躍する女性たちを区民で守り育てていこうとする構江の風土と、男女共同参画を実践しようという男性の考え方を、曾根さんは誇りに思う。

現在、曾根さんは副区長の職を離れ、区自主防災会コーディネーターとして活躍する。また、本業の合間に東日本大震災をはじめとする災害復興支援にも力を注いでいる。稲作が盛んな里山・構江は今、性別や世代を超え、未来への可能性が着実に実り始めている。





渡邊 徹さん

山下 晃さん

焼津市港第23自治会
 焼津市の沿岸部に位置し、市内で4番目に大きい自治会。世帯数は2,700世帯、住民数8,300人。15の町内会で構成される。2014年に静岡県地域防災活動知事褒章を受章した

地域防災の担い手 地域自主防災の取り組み

災害時に頼りになるのは、まず自分、次に家族、そして地域で協力し合う自主防災組織！
 そこで、地域自主防災活動に熱心に取り組む焼津市港第23自主防災会長の渡邊徹さんと焼津市危機管理部・危機対策課主査・山下晃さんに話を聞いた。

地域自主防災に 女性の力を！

港第23自主防災会は、年3回の訓練を実施する。9月の総合防災訓練、12月の地域防災訓練、そして、3月の津波避難訓練だ。全て津波避難タワーを利用する。自主防災会は田尻北、北新田、下小田の三地域で構成され、それぞれ、基地と責任者を設置、地域の特性を生かした内容の訓練である。

防災組織は「イザ災害！」の時、すぐに対応できる体制が整備され、3地域に避難誘導班、救護班、生活班、情報班、消火班が設けられている。訓練への住民の参加率は高く、自主防災会内の80〜90%の世帯が参加する。

これまで、地域自主防災という、頼みの綱は男性！というイメージが強かった。しかし、港第23自主防災会では、女性が救護班を担当。男性も支援するが、班長は女性。女性に担当を任せることで企画段階から積極的にかかわり、女性の視点を取り入れた訓練を実施する。救護班は、住民への応急救護や救護所への搬

送を担う。
 しかし、子育て中の若い女性はなかなか参加してくれない。地域防災に女性力をアップさせるためには、「夫が妻に参加を勧めたり、訓練会場に託児コーナーを設けるといった、工夫も必要」と、渡邊さん。

地域自主防災活動に 女性を巻き込む 秘訣三か条

- ・ 高圧的なトップダウン方式は、女性のやる気をなくす。
- ・ 活躍の場ができると、女性はやりがいを感じる。
- ・ レクチャーは丁寧。女性の理解も進む。

地域と学校も連携

市内の小中学校では年10回、防災学習を実施する。防災訓練では生徒に役割を持たせ、積極的な参加を促す。また、学区ごとに、自主防災会、学校、行政の防災担当が会合を持ち、協力体制を築く。

「危機管理部として自主防災会との信頼関係は重視しています。また、学校との連携や支援にも力を入れています」と山下さん。
 要援護者への対応はどうなっているのだろうか。港第23自主防災会は、町内会ごとに避難行動要支援者マップを作成し、援護を必要とする人を把握。訓練の時もこのマップを活用し安否確認等を実施している。

今後の課題

充実した防災活動を実施する港第23自主防災組織だが、「住民一人ひとりの意識をどう高めていくかが問題です。そのためには、勉強会などを通じた、地道な積み重ねが必要だと感じます。また、広報活動も重要です。例えば、若者向けに絵で表すといった工夫も必要になるのではないのでしょうか」。渡邊さんの言葉から、まだまだ課題は残るようだ。



市が設置した津波避難タワー。1,000人が避難可能。港第23自治会内には7か所の津波避難施設がある。

災害から身を守るための 「自助・共助・公助」のつながり

2014年10月6日の朝、台風18号が静岡市を直撃した。巴川は氾濫水域にまで達し、周囲の道路は冠水した。やがて雨は小ぶりになったが、あと1時間、降り続いていたら…と考えると、恐怖であった。

地震、豪雨、火山噴火など、様々な災害が、日本列島に襲いかかっている。東日本大震災以降、人々の「防災・減災」への関心の高まりを感じる一方で、私自身、自然災害は起こるべくして起こるものであり、被災した時はその時だと考えていた。しかし、家族ができ、災害に備え何かしなければと、漠然とした不安がよぎる毎日でもあった。そんな私が今回の特集で「防災・減災」に真っ向から向き合うことになった。

自助・共助・公助の意味

防災の基本は「自助・共助・公助」と言われる。自助は、「自分の身は自分で守る」、共助は、「近くの人でお互い助け合う」、公助は、「公的機関によって提供される援助」を意味する。言葉としては理解出来る。政府や自治体も「災害時には『自助・共助・公助』の連携が必要」と呼び掛けている。だが、心に言葉が響いてこない。何故だろうか。

それは私の思考が、「自助▽共助▽公助」ではなく、「公助▽共助▽自助」であることに気がついた。地震が起きたら避難所に行けば、なんとかなるだろう。避難所では公共の助けが得られるだろうと考えていた。しかし、東日本大震災のような大規模広域災害時には、行政が全ての被災者を迅速に支援することが難しい上、行政自身が被災して行政機能が麻痺する「公助の限界」が起きることが、『平成26年版防災白書』でもうたわれている。つまり、公助は最後の砦、まずは、自助、次に共助である。

居住地で「自助」を考える

「自助」を考えるには、居住地域における災害の危険性や防災への取り組みを知ろうと学区の防災訓練を見学した。参加者は各町内の自主防災組織の役員と学区に住む中学生、地区担当の市役所の職員で80人ほど。NPO法人「災害・医療・町づくり」の指導のもと、トリアージの訓練が行われた。トリアージは、負傷者が同時に多数発生した場合、傷病者

の重症度と緊急度によって分別、治療や搬送先の順位を決定することで命を救える患者を優先するための災害医療の一つであり、災害救護では重要な訓練だ。患者も患者にメイクを施すなどして臨場感のある訓練であった。

静岡県は自主防災組織が100%整備されているが、残念ながら地区の取り組み状況には、温度差がある。合同運動会があっても、住民全員参加の防災訓練はないという地区もある。また、町内の自主防災組織のメンバーも年ごとに入れ替わるため、自らが積極的に情報を収集しないと災害時に正しい行動が取れず、「自助」は難しい。また、日頃から地域コミュニティを高めなければ、いざという時の「共助」も発揮されないだろう。

防災教育や訓練の意義

「普段やらないことは、いざというときにできない」という言葉は、阪神淡路大震災後に生まれた教訓である。東日本大震災でも、それまで避難訓練に参加してこなかった人は避難出来ず、津波で命を落としたというデータがある。防災教育には、災害に対する正しい知識を深める「学び」と、防災・減災に備えるための「判断対応力」「実行力」を育てる目的がある。《金石の奇跡》は、まさにそれらが結実していたからこそ、市内小中学生の生存率99.8%を生み出すことが出来たと言える。「自助」の基盤として防災教育の重要性に改めて気づかされる。



防災体験学習1. ～煙体験の様子～

天ぷら火災の危険を劇やクイズで伝え、実際に煙を体験する

防災訓練のメニュー	
1	煙体験
2	放水訓練
3	水消火器訓練
4	防災クイズ
5	簡易トイレ組み立て
6	担架訓練
7	震災体験車
8	心肺蘇生(AED)
9	救護



トリアージ訓練の様子

やってみました！防災キャンプ

「楽しいLa・防災はまだ」は、2013年10月から始まった「島田市ゆめ・みらい百人会議」の防災分科会の愛称。防災を楽しく学びたいと集まった障害者を含む男女12人が、研修会だけでなく、食事会、カラオケなどを通して、理解と尊重、共存関係を築いてきた。

メンバーで「防災キャンプ」の実施を決定。リーダーの杵塚衛(きねづかまもる)さんが市役所に打診したところ、反応はイマイチ。防災のプロも本気？と念を押す始末。しかし元消防士のメンバーが中心となり、自主防組織の協力も得て、2014年8月、メンバーとその家族、5歳から80代までの計13人が1泊2日の手作り防災キャンプに挑んだ。場所は島田市道悦公民館脇。米は寄付のアルファ米、野菜はメンバーの畑から調達。水は1人3リットル、寝袋持参。警察に届け出を出し、防災倉庫の備品借用の許可を取り、防災キャンプ実施中の看板を掲げ当日を迎えた。

まずは屋外テントを設営。急な雨にブルーシートで雨樋を作り、アスファルトは痛いのでマットを敷き詰めた。薪を燃やし、水を節約しながらの炊き出し、簡易トイレの組立、ロープワーク、SNSでの情報発信など、多岐多様、臨機応変に対応した。しかし実際は、駅前のトイレを使用し、水もたくさん使った。水が一人1日3リットルでは、足りなかった。夜には電車や発電機の騒音、アリや蚊の襲来、夜警当番で眠れない人もいた。入念な準備と家族のような仲間でさえも1泊2日が限界。まして、面識のない者同士の長期にわたる被災生活はとても困難だと感じた。だからこそやってみて良かったと、杵塚さんは語る。

「現在、防災に関心のある人とない人との温度差は、大きいと感じます」と杵塚さん。地球温暖化であらゆる災害がいつ起きてもおかしくない状況の中、防災の領域は幅広い。常日頃から、被災状況をイメージし、仲間と楽しく備えに取り組むことで防災活動は長続きする。日頃の気兼ねない付き合いや自らの地域を知ることが、地域防災力アップのカギとなる。



1日ばかりで行う富士市立 富士南中学校の防災体験学習

富士市立富士南中学校では、2001年度から大規模地震を想定した防災訓練を実施している。毎年11月、全校生徒が参加して1日ばかりの「防災体験学習」が行われる。中学校のある富士南地区は、富士市内で最も人口が多く、過去に起きた富士川の氾濫や津波の心配から、災害に対する危機意識が高い地区である。

「防災体験学習」は、午前の防災訓練と午後の防災に関する講演会等に分かれており、防災訓練は、学校関係者だけではなく、富士市消防本部、富士市役所、地区の自主防災組織の協力のもと、9つの体験メニューから生徒自身が5つ体験できる訓練内容となっている。特徴は、3

年生が総合学習の時間に防災についての知識を学び、1か月前から事前学習をし、訓練で下級生に伝える役割を果たしている点だ。全ての訓練で防災知識を楽しく学んでもらいたいと劇やクイズを行い、3年生が教える立場として積極的に指導している。まさに「学び」を試す訓練になっている。

午後は、2012年から交流が続く石巻西高等学校理科教諭・大竹先生による講演会が行われる。「津波の仕組みと津波防災」をテーマに津波のメカニズムをスライドと模型を使った津波実験を用い、分かりやすく生徒に伝える。震災の教訓を防災教育という形できちんと伝えていくことの意義が、強く感じられる講演であった。

富士南中学校は、「防災体験学習」以

外にも石巻西高校で行われる「シンサイミライ学校」への参加や、年3回防災避難訓練を行っており、防災教育への熱心な取り組みが2014年度静岡県地域防災活動において知事褒賞を受けている。また、2週間後に行われる地域防災訓練にも中学生が参加することから、災害時の若い中学生の役割に大きな期待が寄せられている。同校の取り組みは、防災教育が生徒の自助力を高め、地域の防災力向上へとつながる好事例と言える。

災害はいつおこるかわからない。命と日々の生活を守るために、今こそ、私たち一人一人の防災力の強化が求められるのではないだろうか。

〈参考文献〉

内閣府『平成26年度版防災白書』(2014年)
河田恵昭著『これからの防災・減災がわかる本』(2008年)
岩田貢・山脇正資編『防災教育のすすめ―災害事例から学ぶ―』(2013年)



防災体験学習2

あざれあ図書室から おすすめの本を紹介します!

あざれあ図書室では、「女性・男女共同参画の視点で防災について考える本」を所蔵しています。今回は、その中から特におすすめの2冊をピックアップ!“女性が防災支援に関わること”がなぜ必要なのかを、具体的な事例を交えて紹介します。

『女性×男性の視点で総合防災力アップ』69.3/Aサ
(浅野幸子 財団法人日本防火協会 2011年)



災害時に男女が共に活躍するためには、日頃から地域の防災対策に男女共同参画の視点を盛り込むことが大切です。基本的な考え方から、計画立案、具体的・実践的な事例までをイラストつきでわかりやすく説明します。

『男女共同参画の視点で実践する災害対策テキスト』369.3/ダン
(東日本大震災女性支援ネットワーク研修プロジェクト担当 東日本大震災女性支援ネットワーク 2013年)



東日本大震災の現場での活動をもとに、女性や多様なニーズを持つ被災者に配慮した、地域の防災計画の見直しや防災に関する人材育成プログラムを紹介します。防災政策、地域防災活動に関わっている人におすすめです。

その他の「女性・男女共同参画の視点で防災について考える本」については、あざれあ図書室発行の「女性と防災 BOOK リスト」でご紹介しています。

利用案内

貸出: 図書5冊、ビデオ・DVD2本(2週間)
開室時間: 平日9:00~18:00、土日祝9:00~17:00
休室日: 第1・3・5日曜日、図書整理日
TEL: 054-255-8763 FAX: 054-255-8759

編集員募集

募集人員 / 若干名
仕事内容 / 情報誌『ねっとわあく』(66・67号)の企画・取材・原稿案の作成・編集から発行まで
作業会場 / 静岡県男女共同参画センターあざれあ
募集締切 / 平成27年4月12日(日)まで
選考 / 書類選考
その他 / 1号発行につき3万円
別途、会議や取材などの交通費支給
問合せ先 / あざれあ交流会議グループ TEL054-250-8147
E-mail info@azarea-navi.jp



Shizuoka Prefecture

ねっとわあく

2015/3/11 Vol.65

「ねっとわあく」は年2回(3月、10月)発行します。県民生活センター、県内の男女共同参画センター、市町役場、公民館などの公共施設で配布しています。会社やご友人にも是非回覧してください。

編集後記



写真 前列左から 齋藤典子 松永多佳夫
後列左から 國井良子 黒田麻紀子 園部真由美

●東日本大震災で帰宅困難者となった。余震の中、2歳の孫と妊婦の娘と皇居内に避難。その後が大変であった。JRや私鉄が止まり、復旧の見込みが立たなかったため、避難場所を求めて歩く人の波。バギーに幼児を載せて歩くワーキングママ。ランドセル姿の小学生。都市型災害の怖さを知った。妊婦の受け入れさえも断る大型ホテルが多いなか、R外食チェーンだけは、心よく帰宅困難者のために温かい飲み物つきで迎え入れてくれた。もちろんその後の私は、その店のファンになった。(編集長 齋藤典子)

●ふじのくに防災士になって2年。日常生活の中で後回しになりがちな「防災」にいろいろな形で取り組んできました。防災は、命を守り、生きてその先に繋げることだと思います。できることからやってみる、その積み重ねが命を守ることに繋がります。(國井良子)

●災害という困難を乗り越える自信はまだないけれど、防災に対する意識がガラッと変わりました。まさに「私と防災」元年!それを教えてくれた皆さんに感謝です。(黒田麻紀子)

●「静岡に住むなら、小さな命を守るために防災を学びたい」がきっかけでした。それが偶然携わった男女共同参画と表裏一体だと、途中で気づきました。防災は総合力。抜き打ちで家族や地域の「生き抜く力」が試されます。だからこそ社会の根底に、日々信頼し、担いあえる男女・人間関係があってほしいと願い、活動しています。(園部真由美)

●退職してから悠々自適に過ごしてきた私にとり、若い人達のパワーに圧倒される1年であった。彼女らの足を引っ張ることもあったと思うが、何とか背中を押してもらい1年間を過ごすことができた。感謝している!!(松永多佳夫)

発行日/平成27年3月11日
企画・編集・発行/あざれあ交流会議グループ
〒422-8063 静岡市駿河区馬淵1丁目17-1
TEL/054-250-8147 FAX/054-251-5085

編集長/齋藤典子
編集員/國井良子、黒田麻紀子、園部真由美、松永多佳夫
印刷/星光社印刷株式会社